

台湾有事が問いかけるもの

久留米商業高等学校 二年

最近、ニュースで「台湾有事」という言葉を耳にすることが増えた。もしそれが現実には起きれば、世界や日本に大きな影響を及ぼすだろう。しかし、それ以上に私が考えるのは、戦争や争いによって一番影響を受けるのは、政治家や軍隊ではなく、そこに暮らす普通の人々だということである。人々の平和な生活や、人間として当たり前前に守られるべき人権が、一瞬にして奪われてしまうからだ。

私には、中国に住んでいる友達がいる。その子は学校に通ったり、趣味の話をしたり、私と同じように毎日を過ごしている。しかし、もし戦争が起きれば、勉強をする場所も、安心して眠れる家も、一気に失ってしまうかもしれない。そのことを想像すると、とても他人事には思えない。

さらに、私の祖父は中国人で、日本に移り住んだ人だ。祖父が日本で家族を持ったからこそ、私は今ここにいる。

だからこそ、中国や台湾で起こる出来事は、私自身の歴史や未来とも無関係ではないと強く感じる。戦争が始まれば、そこに暮らす人々の人権は様々な形で脅かされる。まず、安全に暮らす権利が失われる。空襲や攻撃の危険にさらされれば、日常そのものが崩れてしまう。また、学ぶ権利や働く権利も奪われる。子どもは学校に通えず、大人は職を失い、家族を養うことができなくなる。さらに、言論の自由や表現の自由も制限される可能性がある人々が「自分らしく生きること」が難しくなるのだ。

そして、その影響は決して遠い国の出来事にとどまらない。実際に、私が住む地域でも、もし台湾有事が起きれば、避難してくる人々を受け入れる仕組みがあると聞いた。つまり、自分の身近な地域にも戦争の影響が直接及ぶかもしれないのだ。

戦争によって住む地域を追われた人々がやってきた時、私たちはどう向き合うべきだろうか。言葉や文化が違うからといって冷たくするのはではなく、同じ人間として温かく迎えることが大切だと思う。なぜなら、人権は国籍や民族に関係なく、全ての人に平等に与えられるものだ。しかし、現実には避難してきた人々に対して、「外国人だから」という偏見や差別が生まれる可能性もある。日本人の生活が影響を受けるのではないかという不安が、心の壁を作ってしまうこともあるだろう。それでも、祖父や友達を思い浮かべれば、彼らを「外国人」として区別することはできない。戦争で苦しむのは、私と同じように家族や夢を持った人々だ。もし、自分や家族が逆の立場で国外に逃げなければならなくなったら、どのように受け入れてほしいかを考えれば答えは明らかである。

もちろん、私ひとりが大きな戦争を止めることはできない。けれども、身近な場所でできることはある。例えば、避難してきた人が学校に通うときに偏見のない態度で接すること。日常

の中で、外国人を排除するのではなく、同じ地域で暮らす仲間として受け入れる姿勢を持つこと。小さな一歩かもしれないが、それが人権を守る行動につながるのではないかと思う。

「台湾有事」という言葉は、私にとって不安を感じさせる響きを持っている。しかし同時に、それを考えることは、平和の大切さを改めて実感するきっかけにもなっている。祖父が生きてきた道や、中国に住む友達の存在、そして自分の住む地域。全てが「遠い世界のこと」ではなく、つながっているのだと感じる。だからこそ、私はどこの国の人でも安心して暮らせる未来を願い、人権を尊重する気持ちを持ち続けたいと思う。